

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 小嶋 理江

論 文 題 目

犯罪に対するリスク認知と不安に関する環境心理学的研究

(An Environmental Psychological Study on Risk Cognition and
Fear of Crime Victimization)

論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教 授 久野 覚

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教 授 片木 篤

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授 小松 尚

副 査 東海学園大学心理学部 教 授 高橋晋也

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来曖昧であった潜在的被害者の犯罪に対する認知過程を明確化し、犯罪不安に関係する多面的な諸要因を組み込んだ心理モデルを構築した研究である。犯罪リスク認知と犯罪不安および対処行動の関係について、実験および調査によりモデルの検証を行っている。

本論文は以下の 8 章により構成されている。第 1 章では、これまでの犯罪不安研究を概観し、犯罪不安概念として、新しく、自分には関係なく犯罪が起こりそうであるという客観的犯罪リスク認知と自分に降りかかるかもしれないという主観的犯罪リスク認知を分離し段階的に考える必要性を論じている。第 2 章では、過去の研究事例を拡張した方法により大学キャンパスにおけるフィールド実験を行い、見通し、隠れる場所が不安に大きく影響を及ぼすことを示し、男女差を確認した。第 3 章では、第 2 章のフィールド実験を補完するために画像による実験室実験を行っている。フィールド実験と評価パターンの一致が見られ、実験室実験の有効性を確認した。実験室実験では新しい条件を付加するなど条件をコントロールできる。ポジティブ／ネガティブ情報により評価差が起きること、主観的リスク認知が強く影響すること、またそれらについての男女差が認められた。第 4 章では、犯罪リスクや犯罪不安に関わる環境要因の抽出を目的として実際の町におけるフィールド調査と画像による実験室実験を行っている。環境要因として、見通し、隠れる場所、人の視線が重要な要因として捉えられ、大学キャンパスにおける実験と共通することを示した。不安高場所と不安低場所で異なる評価構造になることが示され、また男女差が顕著に現れた。第 5 章では、実際に抱いている不安な場所や犯罪被害の情報、普段の行動範囲を地点ではなく範囲として白地図上で回答させる実験を行い、それらの関連を調べ、リスク認知と不安の不一致があることを示した。第 6 章では、犯罪リスク認知と犯罪不安および対処行動の関連を学生に対する調査で検討している。客観的リスク認知と主観的リスク認知を分離することにより対処行動へのプロセスに、男女で差異が生じることを示した。また、被害見聞情報だけでは対処行動まで至らないこと、時間経過により不安や対処行動が低下することを示した。第 7 章では、地域住民に対する大規模な意識調査を実施し、客観的リスク認知だけでは対処行動に至らず、主観的リスク認知に伴う不安を介して対処行動に至ることを示した。またこのプロセスには明確な男女差があることを明らかにした。第 8 章は総論で、提案した心理モデルの検討およびその応用性について述べている。

以上のように、本論文は、犯罪不安および対処行動に至るプロセスとして、客観的リスク認知と主観的リスク認知という新たな概念を導入し、そのプロセスの進行には明確な男女差があることを示した。さらにその応用性についても言及しており学術上寄与するところが大きい。よって、本論文提出者小嶋理江さんは、博士（環境学）の学位を授与される資格があるものと判定した。